

靈枢講義 2021年2月14日

『靈枢』九鍼十二原篇 第1段 146字

小鍼之要、易陳而難入、粗守形、上守神、神乎神、客在門、未覩其疾、惡知其原、刺之微、在速遲、粗守閑、上守機、機之動、不離其空、空中之機、清靜而微、其來不可逢、其往不可追、知機之道者、不可掛以髮、不知機道、叩之不發、知其往來、要與之期、粗之闇乎、妙哉工独有之、往者為逆、來者為順、明知逆順、正行無問、迎而奪之、惡得無虛、追而濟之、惡得無實、迎之隨之、以意和之、鍼道畢矣、

【第1節】 テーマ：神

小鍼之要、易陳而難入、粗守形、上守神、
神乎神、客在門、未覩其疾、惡知其原、

【第2節】 テーマ：機

刺之微、在速遲、粗守閑、上守機、
機之動、不離其空、空中之機、清靜而微、
其來不可逢、其往不可追、
知機之道者、不可掛以髮、
不知機道、叩之不發、

【第3節】 テーマ：逆順往來

知其往來、要與之期、粗之闇乎、妙哉工独有之、
往者為逆、來者為順、
明知逆順、正行無問、
迎而奪之、惡得無虛、
追而濟之、惡得無實、
迎之隨之、以意和之、
鍼道畢矣、

【 4 字句の例】

『素問』天元紀大論

推而次之、令有條理、
簡而不匱、久而不絕、
易用難忘、爲之綱紀、
至數之要、願盡聞之、

故其始也、
有余而往、不足隨之、
不足而往、有余從之、
知迎知隨、氣可與期、

至數之機、迫迕以微、
其來可見、其往可追、
敬之者昌、慢之者亡、
無道行私、必得天殃、
謹奉天道、請言眞要

『素問』刺眞要大論

故大要曰、
謹守病機、各司其屬、
有者求之、無者求之、
盛者責之、虛者責之、
必先五勝、疏其血氣、
令其調達、而致和平、
此之謂也、

【第1節】

小鍼之要、（小鍼の要は、）

易陳而難入、（陳べ易くして入り難し。）

粗守形、上守神、（粗は形を守り、上は神を守る。）

神乎神、客在門、（神なるかな神、客、門に在り。）

未覩其疾、惡知其原、（未だ其の疾を^み覩ず、惡んぞ其の原を知らん。）

【第2節】

刺之微、在速遲、（刺の微は、速遲に在り。）

粗守関、上守機、（粗は関を守り、上は機を守る。）

機之動、不離其空、（機の動は、其の空を離れず。）

空中之機、清静而微、（空中と機とは、清静にして微なり。）

其来不可逢、（其の来は逢うべからず。）

其往不可追、（其の往は追うべからず。）

知機之道者、不可掛以髮、（機の道を知る者は、掛くるに髮を以てすべからず。）

不知機道、叩之不発、（機の道を知らざるは、之を^ひ叩きて発せず。）

【第3節】

知其往来、要与之期、（其の往来を知るを、^{かひ}要らず之が^な期と与せ。）

粗之闇乎、妙哉工独有之、（其の闇きか。妙なる工 独り之を有す。）

往者為逆、来者為順、（往は逆と為し、来は順と為す。）

明知逆順、正行無問、（明らかに逆順を知り、正しく行い、問うなかれ。）

迎而奪之、惡得無虚、（^{げい}迎して之を奪う。惡んぞ虚無きを得んや。）

追而濟之、惡得無實、（^{つい}追して之を^{すく}濟う。惡んぞ実無きを得んや。）

迎之随之、以意和之、（之を迎し、之に随するは、意を以て之を和せ。）

鍼道畢矣、（鍼道 畢んぬ。）

九鍼十二原篇第 1 段

はり師が「急性熱病」を対処するときに備えるべき能力

【第 1 節】

粗守形、上守神、（粗は形を守り、上は神を守る。）

【第 2 節】

粗守関、上守機、（粗は関を守り、上は機を守る。）

【第 3 節】

粗之闇乎、妙哉工独有之、（其の闇きか。妙なる工 独り之を有す。）

（ 1 ）急性熱病に対する要諦をのべている

- ①神（研ぎ澄まされた精神、集中した意識）：病気の徴候を察する（先手の治療）
- ②機（タイミング）：治療のタイミングが分かる（臨機応変）
- ③逆順（予後の善し悪し）：急性熱病に逆証・順証があるのを心得ている

（ 2 ）急性熱病と九鍼

①『素問』刺瘡篇

（中鍼・五鍼、鉞鍼）

瘡脉満大急、刺背俞、用中鍼、傍伍、肘俞各一、適肥瘦出其血也、

瘡脉小實急、灸脛少陰、刺指井、瘡脉満大急、刺背俞、用五、肘俞背俞各一、適行至於血也、

（鑱鍼）

筋痠痛甚、按之不可、名曰附髓病、以鑱鍼、鍼絶骨、出血立已、

（鋒鍼）

諸瘡而脉不見、刺十指間出血、血去必已、先視身之赤如小豆者、盡取之、

不已、刺舌下兩脉出血、不已、刺郄中盛經出血、又刺項已下俠脊者、必已、舌下兩脉者、廉泉也、

先頭痛及重者、先刺頭上及兩額兩眉間出血、

先項背痛者、先刺之、先腰脊痛者、先刺郄中出血、

先手臂痛者、先刺手少陰陽明十指間、

先足脛痠痛者、先刺足陽明十指間出血、

風瘡、瘡發則汗出惡風、刺三陽經背俞之血者、

②『靈枢』熱病篇

(第一鍼：鑱鍼、第六鍼：円利鍼、第四鍼：鋒鍼、第三鍼：鍤鍼、)
 熱病、先膚痛、窒鼻充面、取之皮、以第一鍼、五十九、
 熱病、先身濇倚而熱、煩悒、乾脣口噤、取之皮、以第一鍼、五十九、
 熱病、噤乾多飲、善驚、臥不能起、取之膚肉、以第六鍼、五十九、
 熱病、面青、腦痛、手足躁、取之筋間、以第四鍼于四逆、
 熱病、數驚、痙瘓而狂、取之脉、以第四鍼、急寫有余者、
 熱病、身重骨痛、耳聾而好瞑、取之骨、以第四鍼、五十九刺、
 熱病、頭痛、顛顛目痙、脉痛、善衄、厥熱病也、取之以第三鍼、視有余不足、
 熱病、體重、腸中熱、取之以第四鍼於其脛、及下諸指間、
 熱病、挾臍急痛、胸脇滿、取之湧泉与陰陵泉、取以第四鍼、鍼噤裏、

(3) 熱病の 4 期

『靈枢』逆順篇

「上工刺其未生者也、其次刺其未盛者也、其次刺其已衰者也、下工刺其方襲者也、与其形之盛者也、与其病之与脉相逆者也、」

【未病】

(未生期) 上工刺其未生者也、⇒潜伏期間

【已病】

(未盛期) 其次刺其未盛者也、⇒症状が出始めた時期

(方襲期) 下工刺其方襲者也、与其形之盛者也、与其病之与脉相逆者也、⇒病勢盛んな時期

(已衰期) 其次刺其已衰者也、⇒病勢が衰えた時期 (緩解期)

未病・已病	4 期	往期・来期	治療家		逆順・迎隨
未病期	未生期		上工	潜伏段階で発見治療	
已病期	未盛期	来期	中工	症状が出てから治療	順証 迎法をする
	方襲期		最下工	病勢が強くなってから治療 失敗する可能性が大	
	已衰期	往期	下工	緩解期の治療。 ぶり返すので慎重に。 深追いはしない	逆証 隨法をする

【関連文章】

『靈樞』官能篇「上工之取氣、乃救其萌芽。下工守其已成、因敗其形。」

上工之取氣、乃救其萌芽 ⇒ 未生期の治療

下工守其已成、因敗其形 ⇒ 方襲期の治療

『素問』刺熱篇「病雖未發、見赤色者刺之、名曰治未病」

病雖未發、⇒ 未生期の治療

【4期と九針十二原篇】

⇒ 未病期（未生期）の早期発見には「神」力が必要

⇒ 已病期の治療は、「機」（タイミング）が重要

⇒ 已病期には、予後良（順証）・予後悪（逆証）の区別がある

【迎法・随法】

①旧迎随 【第1段】の九鍼を使った迎随

「邪を排除する」ことを目的に、

迎法：迎撃法（熱邪・大邪を取り除く）

随法：追撃法（寒邪・小邪を取り除く）

（参考）

『靈樞』刺節真邪篇「五邪刺」

迎法：癰邪・熱邪・大邪

（鑱鍼）凡刺熱邪、越而蒼、出遊不歸、乃無病、爲開通、**辟門戶**、**使邪得出**、病乃已、

（鈹鍼）凡刺大邪、日以小、**泄奪其有**余、乃益虛、剽其通、鍼其邪、肌肉親視之、母有反其眞、刺諸陽分肉間、

随法：寒邪・小邪

（員利鍼）凡刺小邪、日以大、**補其不足**、乃無害、視其所在、迎之界、遠近盡至、其不得外、侵而行之、乃自費、

刺分肉間、

（毫鍼）凡刺寒邪、**日以温**、**徐往徐來**、致其神、門戶已閉、氣不分、虛實得調、其氣存也、

②新迎随 【第2段】の毫鍼を使った迎随

迎法：写法（邪気の写法）⇒速刺徐抜・鍼孔を閉じない

随法：補法（眞気の補法）⇒徐刺速抜・鍼孔を閉じる

【第1節】

小鍼之要、

(小鍼の要は、)

(小鍼を使う上で大切なことは、)

【小鍼】

①微鍼と同義。九鍼のこと。

②小さい鍼。毫鍼。

『靈樞』厥病篇

「腸中有蟲瘕及蛟蝮、皆不可取以小鍼。」

(腸中に蟲瘕及び蛟蝮有らば、皆な取るに小鍼を以うべからず。)

(腸の中に蟲瘕や蛟蝮があれば、小さい鍼では治療してはいけない。)

③「小」は謙称。「私どもの鍼のやり方の要点は、説明しやすいのです。」

易陳而難入、

(陳べ易くして入り難し。)

(説明することはたやすいが、身につけることは難しい。)

小鍼の使い方を説明することは簡単だが、小鍼の運用で大事な「神」を身につけることは難しい(身につけば「入神の技」という)。

粗守形、

(粗は形を守り、)

(粗工は、形を固守する。)

粗工は、症状を固守すること(症状が出るまで待っていること)。形は、ここでは病形・症状。

* 『靈樞』官能篇

「下工守其已成、因敗其形。」

(下工の其の已に成るを守るや、因りて其の形を敗る。)

(下工は症状が出るのを待つから、なので体は損なわれる。)

* 『素問』八正神明論

「形乎形、目冥冥、問其所病、索之於經、慧然在前、按之不得、不知其情、故曰形、」

(形なるかな形。目冥冥とするも、其の病む所を問い、之を經に索むれば、慧然として前に在り。之を按ずれども得ず、其の情を知らざる。故に形と曰う。)

(形の技である、症状にこだわっているのは。良く見えなくても、症状を聞いて、実際に触診すれば、眼前にはっきりとわかる。これが形である。触診して分からなければ、病気の状態がわからない。これも形でもある。)

上守神、

(上は神を守る。)

(上工は神を保ち守る。)

上工は「神」の状態を保ち維持している。神は、「研ぎ澄まされた精神、集中した意識」である。研ぎ澄まされた精神で病気の兆候を察知することを「神」といい、また察知できる人を神という。第3節の「妙なる」も、神業に近い、巧みなさま。「神」は、精神・意識。

* 第2段

①「神在秋毫、属意病者、」

(神は秋毫にあり、意を病者に属げ。)

(精神を微細に研ぎ澄まし、意識を集中させて病者に注げ。)、

②「神属勿去、知病存亡、」

(神は属ぎて去る勿れ、病の存亡を知る。)

(精神を集中して病者に注ぎ、目を離してはならない。病気の存亡を知るためなのだ。)

* 『素問』宝命全形論

「神無營於衆物。」

(神は衆物に營さるるなかれ。)

(精神は周りのモノに乱されてはならない。)

神乎神、

(神なるかな神。)

(神のような人だ、研ぎ澄ました精神の持ち主は。)

* 『易』繫辞伝

「知幾、其神乎。」

(幾を知るは、其れ神か。)

(兆しを知るのは、神のような人だ。)

* 『淮南子』精神訓

「神則、以視無不見、以聽無不聞、以為無不成也。是故憂患不能入也、而邪氣不能襲。」

(神なれば則ち、視るを以て見ざる無し、聴くを以て聞かざるなし、為すを以て成らざるざし。是の故に、憂患は入る能わざるなり、而して邪氣は襲う能わず。)

(神であれば、視ても見えないものはなく、聴いても聞こえないものはなく、為しても成らないものはない。神であるので、憂い患いが入り込む余地はなく、邪氣も襲う余地が無い。)

* 『素問』八正神明論

「神乎神、耳不聞、目明、心開而志先、慧然獨悟、口弗能言、俱視獨見、適若昏昭然獨明、若風吹雲、故曰神。」

(神なるかな神、耳聞かざるも、目明らかにして、心開けて志先^{あら}わるれば、慧然として独り悟り、

口言う能わず。俱に視て、独り見、適^{まさ}に昏^{くれ}に昭然として独り明らかなるが若し。風の雲を吹くが若し。故に神と曰う。)

(神の技である、神を守るのは。耳から情報は入ってこなくても、視力がすぐれ、心が開けて、心が洗われていれば、はっきりと独りだけわかる。口では説明できない。皆で視ても、独りだけ見える。それは暗がりの中にそこだけぱっと明るいように。あるいは風が雲を吹き飛ばしたように。これを神という。)

客在門、未覩其疾、惡知其原、

(客、門に在り、未だ其の疾^みを覩^みずして、惡^{いず}くにか其の原を知らん。)

(潜伏期間で、病症が出ていなのに、どのようにして病気のはじまりを知ったのだろうか。)

神の人は、外邪が侵入して、症状が出ていないのに、どのようにして病気の原因(はじまり)を探ることができたのだろうか。それは、研ぎ澄ました精神の持ち主だからであり、原穴を探って(偵察して)五蔵の病気を見つけたことができたのだ。

* 客は外邪。門は入り口。外邪が門に入り込む。病期でいえば潜伏期間。覩は偵察する。原は五蔵の病気の源(はじまり)を探る原穴。

* 第8段

「五蔵有疾也、應出十二原」

(五蔵に疾あるや、応は十二原に出づ。)

(五蔵に疾が有れば、手応えが、十二の原穴に現れる。)

「明知其原、觀其應而知五藏之害矣」

(其の原を明知するは、其の応を觀て、五藏の害を知ればなり。)

(原穴をはっきりと知ることができるのは、その手応えをうかがって、五藏の害を知るから。)

* 『靈樞』官能篇

「上工之取氣、乃救其萌芽。」

(上工の氣を取るや、乃ち其の萌芽を救う。)

(上工は邪氣を察して、病氣の萌芽の段階で治す。)

【第2節】

刺之微、在速遲、

(刺の微は、速遲に在り。)

(鍼刺の微妙さは、素早さにある。)

第2節から「機」(治療のタイミング)を話題にしているので、已病期を前提としている。「上は機を守る」(上工はタイミングよく治療する)からすれば、判断・行動の素早さ、迷いが無いことを言う。後文の「不可掛以髮」(間に髪を容れない)に通じる。つまり、速遲は、偏義複詞で、速に意味がある。

粗守関、

(粗は関を守る。)

(粗工は関を固守する。)

* 粗工は、四関にある原穴にこだわる(守)。已病期は治療のタイミングが大事なのに、粗工はまだ、原穴で五藏の病氣の始まり(潜伏期)を見ている。そんな場合ではないのだ。

* 第8段

「十二原出於四関。」

(十二原は、四関に出づ。)

(十二原穴は、四関にあらわれている。)

* 『靈樞』官能篇

「工之用鍼也、知氣之所在而守其門戸」

(工の鍼を用いるや、氣の所在を知りて、其の門戸を守る。)

(工の鍼治は、邪気の所在を知って、門戸を必死に守ろうとする。)

上守機、

(上は機を守る。)

(上工は機を保ち守る。)

上工は、治療のタイミングをよく知っている。「守」は、保ち守ること。「機」は、物事をするのに適したころあい。

機之動、不離其空、

(機の動は、其の空を離れず。)

(ころあいよく動くには、空虚な心と切り離せない。)

* 「機之動」は「機動」に同じ。物事をするのに適したころあいに応じて素早く行動・適応するさま。

* 「空」は心が空虚であること。つぎの「清静而微」と同じ。

* 『素問』八正神明論「心開而志先」(心開きて志^{あら}先わる)に通じる。

空中之機、清静而微、

(空中の機は、清静にして微^{かす}かなり。)

(空虚な心で、機を活かすには、清静な心で、精緻さがもとめられる。)

空虚な心で、状況に応じて素早く行動・適応するには、心がすっきりして静かで落ち着いていなければならないし、精緻な判断が必要である。(心が騒がしいと、ころあいがわからない。)

空中——清静＝空虚で清静の心

機——微＝機は微妙

* 『老子』16章

「致虚極、守静篤」

(虚極を致し、静篤を守る。)

(己の心をどこまでも虚しくし、あくまで静けさを守っていく。)

其来不可逢、其往不可追、

(其の来は逢うべからず、其の往は追うべからず。)

(病気が盛んな「来」は、軽々しく迎え撃ってはならない。病気が治りかけの「往」は、むやみに追い撃ってはならない。)

* この句（其来不可逢、其往不可追）に「来」「往」とあるので、往来をテーマにしている第3節に有るべきか。

* 其来不可逢：「来」は、ここでは方襲期のことをいう。病勢が盛んであるときは、輕易に迎え撃ってはいけない。

4 期	第 2 節	第 3 節
未生期		
未盛期		来期（来為順）
方襲期	来期（其来不可逢）	
已衰期	往期（其往不可追）	往期（往為逆）

* 『素問』離合真邪論

「無逢其衝而寫之。」

（其の衝^{むかう}を逢^{むか}えて之を写すなかれ）

（その向かってくるのは、迎法をして瀉してはならない。）

* 「逢」は仮字で、本字は「迎」。

* 「往」は已衰期のことをいい、病勢が過ぎ去るの意。病勢が衰え始めているのは深追いしてはならない。

『素問』陰陽應象大論篇

「其盛可待衰而已。」

（其の盛んなるは、衰うを待ちて已やすべし。）

（その盛んな状態は、衰えるのを待つてから、治療したほうが良い。）

* 『素問』離合真邪論

「候邪不審、大氣已過、寫之則眞氣脱、脱則不復、邪氣復至、而病益蓄、故曰、其往不可追、此之謂也。」

（邪を候^{うかが}うに審^{つまび}らかならずして、大氣已に過ぐるに、之を写すれば則ち眞氣脱し、脱すれば則ち復せず、邪氣復び至りて、病益ます蓄む。故に「其往不可追」と曰う。此れを之れ謂うなり。）

（邪の観察が不十分で、方襲期を過ぎて已衰期に入って、そこで瀉法すれば眞氣がぬけて回復しない。よって邪氣が再興して病氣は一層重くなる。このことを「其往不可追」という。）

* 「迎」は、迎うように手当てすること（迎撃）。「追」は、後から救済すること（追撃）。以上のことから、「迎」・「追」が本字。この文章の「其来不可逢」の「逢」は仮字で、迎が本字。第2段「補曰随之」、『難経』七十九難「随而济之者、補其母也」の「随」は仮字で、「追」が本字。

【往・来の用例】

* 『莊子』人間世篇は「來世不可待，往世不可追也」（来世は待つてはならない。往世は追つてはならない）

『呂氏春秋』聽言「往者不可及、來者不可待」（過去は追つてはならない、将来は待つてはならない）

『莊子』山木篇「其送往而迎來、來者勿禁、往者勿止」（往くは自然にまかせ、妄りにとどめてはならない）

『孟子』盡心下にも「往者不追、來者不拒、」（来るも去るも自由に任せる）

『論語』微子篇「往者不可諫、來者猶可追」（過去はどうにもならないが、将来はどうとでもできる）。

知機之道者、不可掛以髮、

（機の道を知る者は、掛くるに髪を以てすべからず。）

（機道を知っている者は、素早く行動でき、間に髪を入れない。）

* 機道（物事をするのに適したころあいに応じて素早く行動・適応するさま）を知っている者は、間に髪をいれない行動ができる。

* 「掛」は、気にかかる、心がひかれる。機かどうかを気につけ、即座に機を判断できること。

* 『素問』離合真邪論

「不可挂以髮者、待邪之至時、而発鍼寫矣、若先若後者、血氣已盡、其病不可下、故曰、知其可取、如発機、不知其取、如扣椎、故曰機道者、不可挂以髮、不知機者、扣之不発、此之謂也。」

（「不可挂以髮」とは、邪の至る時を待ちて、鍼を発して寫すなり。「若先若後」とは、血氣已に盡くれば、其の病 下すべからず。故に曰く、其の取るべきを知るは機を発するが如し、其の取るを知らざるは、椎を扣くが如し。故に「機道者、不可挂以髮、不知機者、扣之不発」と曰う。此れを之れ謂う也。）

（「不可挂以髮」とは、邪氣が来るのを待ち、来るやいなや鍼を発して瀉法すること。「若先若後」とは、血氣が尽きてしまって、病氣を攻め落とすことはできないこと。ゆえに機を発するよう

に治療すべき時を知り、椎を叩く（？）ように治療すべき時が分からない、これを「機道者、不可挂以髮、不知機者、叩之不発」という。）

不知機道、叩之不発、

（機の道を知らざるは、之を叩ひきて発せず。）

（機道を知らない者は、手控えてしまい、行動できない。）

* 「叩」は、控の意。手控えること。「不発」は、行動できないこと。ころあいが分からない者は、躊躇し迷い、素早く行動して適応することができない。

【第3節】

知其往来、要与之期、

（其の往・来を知り、要かならず之が期なを与せ。）

（病気の往・来の経過を知って、いつでも期の判断をせよ。）

* 往・来とは、往期・来期のこと。第3節では、来期は未盛期、往期は已衰期。

* 「期」は、治る時期・死亡する時期。『史記』倉公伝に「決在急期」（急ぎだと判断した）、「死期有日」（死亡の時期は日にちが決まっている）、「安穀者過期、不安穀者不及期」（穀物に満足する人は死期を超え、穀物に不満な人は死期に未満となる）とある。

* 類似の句が『素問』天元紀大論に「有余而往、不足随之、不足而往、有余従之、知迎知随、**氣可****与期**」とある。「有余而往、不足随之」（有余で病気が進めば、「不足する」に従う＝迎）、「不足而往、有余従之」（不足で病気が進めば、「有余する」に随う＝随）と解釈すれば、「氣可与期」は「氣は与ともに期すべし」（迎随を知りて、氣は調整を待つべし）という意味か。

粗之闇乎、妙哉工独有之、

（粗の闇きか。妙なる工 独り之を有す。）

（粗工は往・来に暗く、巧みな上工だけが往・来を知っている。）

粗工は、病期に往・来があることが分かっていない。妙なる上工だけが、往・来に明るく、よく分かっている。

* 「妙」は、神業に近い、巧みなさま。「有」は、往・来の知識を持っていること。『老子』第1章の「常無欲、觀其妙」と関連があると思われる。

往者為逆、

(往は逆と為す)

(往期は逆証である。)

已衰期は、逆証である。逆は、調子よく進まないこと。治療がうまくいかないこと。ぶり返すことがあるので、慎重に治療し、深追いはしない。

* 『靈枢』逆順篇「上工刺其未生者也、其次刺其未盛者也、**其次刺其已衰者也**、下工刺其方襲者也」

4 期	第 2 節	第 3 節
未生期		
未盛期		来期 (来為順)
方襲期	来期 (其来不可逢)	
已衰期	往期 (其往不可追)	往期 (往為逆)

来者為順、

(来は順と為す。)

(来期は順証である。)

未盛期は、順証である。順とは、調子よく進むこと。治療がすらすらはかどること。

* 来期は、未盛期と方襲期に分けられるが、順証であることを考えれば、ここでは未盛期を指すと思われる。

『靈枢』逆順篇の「上工刺其未生者也、**其次刺其未盛者也**、其次刺其已衰者也、下工刺其方襲者也」

明知逆順、正行無問、

(明らかに逆順を知り、正しく行い、問うなかれ。)

(逆・順をよく知って、正しく治療せよ。考えてはならない。)

この逆証・順証をよく知ったうえで、迎法・随法を行べきで、そこに躊躇は要らない。

* 「問」は考察すること。何かを考えると、治療のタイミングを失う。

* 『素問』至真要大論篇に「故曰、知標與本、用之不殆、明知逆順、正行無問、此之謂也」と引用される。

* 逆証：『靈枢』熱病篇

熱病不可刺者有九、

- 一曰、汗不出、大顴發赤、噦者死、
- 二曰、泄而腹滿甚者死、
- 三曰、目不明、熱不已者死、
- 四曰、老人嬰兒、熱而腹滿者死、
- 五曰、汗不出、嘔下血者死、
- 六曰、舌本爛、熱不已者死、
- 七曰、欬而衄、汗不出、出不至足者死、
- 八曰、髓熱者死、
- 九曰、熱而瘧者死、腰折痠癢、齒噤齩也、

迎而奪之、惡得無虛、

(^{げい}迎して之を奪う。悪んぞ虚無きを得んや。)

(迎法をして、迎え撃って病邪の勢いを奪えば、かならず弱まる。)

* 迎法は、迎撃。出迎えるように手当てすること。「未盛期」は、病気を出迎え、病勢を削ぐようにする。熱邪・大邪を除去すれば、病勢は必ず衰弱する。

* 刺節真邪篇の熱邪・大邪を対象とするか

(鑱鍼) 凡刺熱邪、越而蒼、出遊不歸、乃無病、爲開通、辟門戶、使邪得出、病乃已、

(鈹鍼) 凡刺大邪、日以小、泄奪其有余、乃益虚、剽其通、鍼其邪、肌肉親視之、毋有反其眞、刺諸陽分肉間、

追而濟之、惡得無實、

(^{つい}追して之を^{たす}濟く。悪んぞ実無きを得んや。)

(追法して、真気を助ければ、かならず充ちてくる。)

* 追法は、「已衰期」に、後追い(追撃)して手当てし、真気を助けて(濟)充実させる。

* 刺節真邪篇の寒邪と小邪を対象とするか

(員利鍼) 凡刺小邪、日以大、補其不足、乃無害、視其所在、迎之界、遠近盡至、其不得外、侵而行之、乃自費、刺分肉間、

(毫鍼) 凡刺寒邪、日以温、徐往徐來、致其神、門戶已閉、氣不分、虚實得調、其氣存也、

迎之随之、以意和之、

(之を迎し、之に随するは、意を以て之を和せ。)

(迎法するも、追法するも、集中した意識をもって、病気を終えさせるべきである。)

* 「随之」の本字は「追之」。

* 「意」は、第2段に「属意病者」（意を病者に属^{まゐ}げ）とあり、「神属勿去」（神属^{まゐ}ぎて去る勿れ）とあるところを見ると、意と神は同じと思われ、冷静な意識・研ぎ澄まされた精神を指す。意気自如（落ち着いて動じない）のことか。

* 「和」は、平和の意。戦争のない穏やかな状態。或いは調和の意。

* 『素問』刺真要大論

「令其調達、而致和平」

（其れ調達せしめ、而して和平を致す。）

（調整させて、和平に導く。）

* 参考：『鬼谷子』飛箝篇「用之於人、則量智能、権材力、料氣勢、為之枢機、飛以迎之隨之、以箝和之、以意宣之、此飛箝之綴也。」

鍼道畢矣、

（鍼道 畢んぬ。）

（「鍼道」の段落はここで終わる。）

* 「鍼道畢矣」は、篇名（段落名）が後に置かれる形式。九鍼十二原篇に「九鍼畢矣」「鍼害畢矣」「刺之道畢矣」とあり、『靈樞』官能篇に「刺道畢矣」「鍼論畢矣」、『靈樞』九鍼論に「鍼形畢矣」とある。